

# ソグディアナの都市を探る

## —ウズベキスタン共和国クルドル・テパ遺跡発掘調査(2024年度)—

村上 智見 東北芸術工科大学准教授

ベグマトフ・アリシエル ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー研究員 / サマルカンド国立大学准教授

サンディボエフ・アリシエル サマルカンド考古学研究所研究員

アリモフ・ナヴルズ サマルカンド考古学研究所博士後期課程

ベルディムロドフ・アムリディン サマルカンド考古学研究所上席研究員

アスラノフ・アブデュヴァリ サマルカンド考古学研究所研究員

寺村 裕史 国立民族学博物館准教授

宇野 隆夫 帝塚山大学客員教授

末森 薫 国立民族学博物館准教授

押鐘 浩之 国立民族学博物館外来研究員

## Exploring Urban Centres in Sogdiana: Excavations at Kuldor-tepa in Uzbekistan (2024)

MURAKAMI, Tomomi Associate Professor, Tohoku University of Art and Design

BEGMATOV, Alisher Research Scholar, Berlin-Brandenburg Academy of Sciences. Associate / Professor, Samarkand State University

SANDIBOEV, Alisher Research Fellow, Samarkand Archaeological Institute

ALIMOV Navruz PhD candidate, Samarkand Archaeological Institute

BERDIMURODOV, Amridin Senior Research Fellow, Samarkand Archaeological Institute

ASLANOV Abduvali Research Fellow, Samarkand Archaeological Institute

TERAMURA, Hirofumi Associate Professor, National Museum of Ethnology

UNO, Takao Visiting Professor, Tezukayama University

SUEMORI, Kaoru Associate Professor, National Museum of Ethnology

OSHIKANE, Hiroyuki Visiting Researcher, National Museum of Ethnology

### 1. はじめに

本プロジェクトでは、シルクロードの国際商人として知られるソグド人の歴史と文化を解明するため、2022年度よりウズベキスタン共和国サマルカンド州南東部に位置する二遺跡、クルゴン・テパ遺跡とクルドル・テパ遺跡において発掘調査を実施している。本稿ではクルドル・テパ遺跡の2024年度発掘成果について報告する。

クルドル・テパ遺跡は、ソグディアナにおける主要な都市国家の一つであるマイムルグ(米国)の領域に含まれていたとみられる都市遺跡である。漢文資料には「米」の姓を持つ胡人が頻繁に記録されており、当該地域出身の人々が米姓を名乗ったとする説が一般的である。しかし、マイムルグの中心都市がどこにあったのかについては長らく議論が続けられており、クルドル・テパ遺跡とペンジセント遺跡が意見を二分している。ペンジセント遺跡の発掘調査は大規模に継続して行われてきた一方で、クルドル・テパ遺跡はこれまで

小規模な発掘調査が断片的に行われてきたにすぎず、詳しいことは明らかになっていない。

そこで、クルドル・テパ遺跡とマイムルグとの関連を明らかにすることを目的に、2023年度から発掘調査を実施し、寺院とみられる建造物と、寺院の礼拝室とみられる部屋から四葉座内行花文鏡が出土するなど、遺跡の性格を知る上で重要な成果を得ることができた。建造物のさらに下層には別の遺構が確認できたことから、2024年度はこれらが作られた時期と寺院のさらに詳しい構造を明らかにするため掘り下げを行った。

### 2. 遺跡の概要

クルドル・テパ遺跡(39° 29'38"N, 67° 10'10"E)は、サマルカンド州南東部ウルグット地区北西に位置しており、サマルカンド市(アフラシアブ遺跡)から約25 kmの距離にある都市遺跡である。遺跡は長方形の城壁に囲まれたシャフリスタンと、突出した円形シタデルから構成されており(図1)、残存する遺跡の範囲は17 haである。城壁外には複数の円形丘(テパ)があ



図1 クルドル・テパ遺跡とトレンチの位置(Saidov 他 2019 図1aを一部改変・訂正)

り、これらはかつての市街地を形成していたと考えられる(Saidov ほか 2020、Sandiboev 2021、村上ほか 2024)。

当該遺跡は旧ソ連の学者らにより、ソグディアナの都市国家である米国(マイムルグ)の有力な候補地とされてきた(Sandiboev 2021)。この説は、サマルカンドからマイムルグまでの距離が記された漢文資料との矛盾が指摘されるものの、今日まで残る地名からも当該遺跡周辺がマイムルグであった可能性が考えられる。当該遺跡の古代・中世期における名称は不明であるが、現在、遺跡周辺は現地の人々から「マイマナック」と呼ばれており、これはアラビア・ペルシア語の「マイムルグ」が、ソグド語において「マイマルガック」と音変化されたものが、今日まで継承されてきたものと推定される(Begmatov ほか 近刊)。同遺跡は1950年代にシタデルとシャフリスタン、1970年代と2018～2019年に城壁などにおいて数回の小規模発掘が行われたのみであり(Begmatov ほか 近刊)、考古学的にも詳しいことは分かっていないことから、当該遺跡がマイムルグであるか否かについては今日も見解が分かれている。

### 3. 2024年度調査結果

2023年度はクルドル・テパ遺跡の城壁外南西部に位置するトレンチ⑧を中心に、春と秋の2回に分けて発掘調査を実施し、6世紀から8世紀頃の寺院跡と推定される壁画を備えたコンプレックスを発見した。Room 1(図2)はその構造などから寺院の内陣であると推定した(村上ほか 2024; Begmatov ほか 近刊)。

2024年の発掘調査では寺院建設以前の層の解明を目的として、祭壇室とみられる部屋(Room 1)、その西に隣接する広い空間(room 6)、祭壇室の東に隣接するアイワン・柱廊のある部屋(Room 2)と、その南側をさらに掘り下げた。その結果、2023年度調査成果とも併せて、次の主に4つの時期が明らかになった。

- ①第1建設段階：16～18世紀頃の遺構(トレンチ南側に限定して見られる)
- ②第2建設段階：8世紀半ば頃の遺構(トレンチ北東部)
- ③第3建設段階：6～8世紀頃の寺院
- ④第4建設段階：5世紀頃と推定される寺院以前の遺構

さらに古い紀元1世紀前後および3～4世紀頃の遺物も出土したが、これらに対応する遺構はこれまでのところ見つかっていないことから、今後さらに下層の調査を行う必要がある。

④第4建設段階の遺構は、Room 2の床面(第3建設段階)の約10～15 cm下から発見された(図3)。これにより、6～8世紀の寺院以前にも遺構が存在すること、そしてその遺構を土台として後の寺院が建てられたことが明らかになった。

Room 2の西東部には、南北約2.95 m、東西3.75 m、高さ約1.5 mの長方形の構造物(塔?)が確認され、これに対応するもう一つの構造物が西南部でも確認された。これらの遺構は日干しレンガ(52～53×29～30×8 cm)で築かれており、火災によるものとみられる焼熱を受けた状態であった。表面には漆喰の上に描かれた壁画痕が確認された。これらの遺構は、日干しレンガが混在する土によって埋められ、後の寺院の土台とされた様子が明らかとなった。さらに、塔の可能性のある二基の長方形構造物からRoom 1の入り口へ向かって、3×12～13列の日干しレンガが並べられていたが、その空間もまた同じ土によって埋め戻されていた。このことから、長方形構造物も同時期に作られたものと考えられる。用途については不明であるが、出

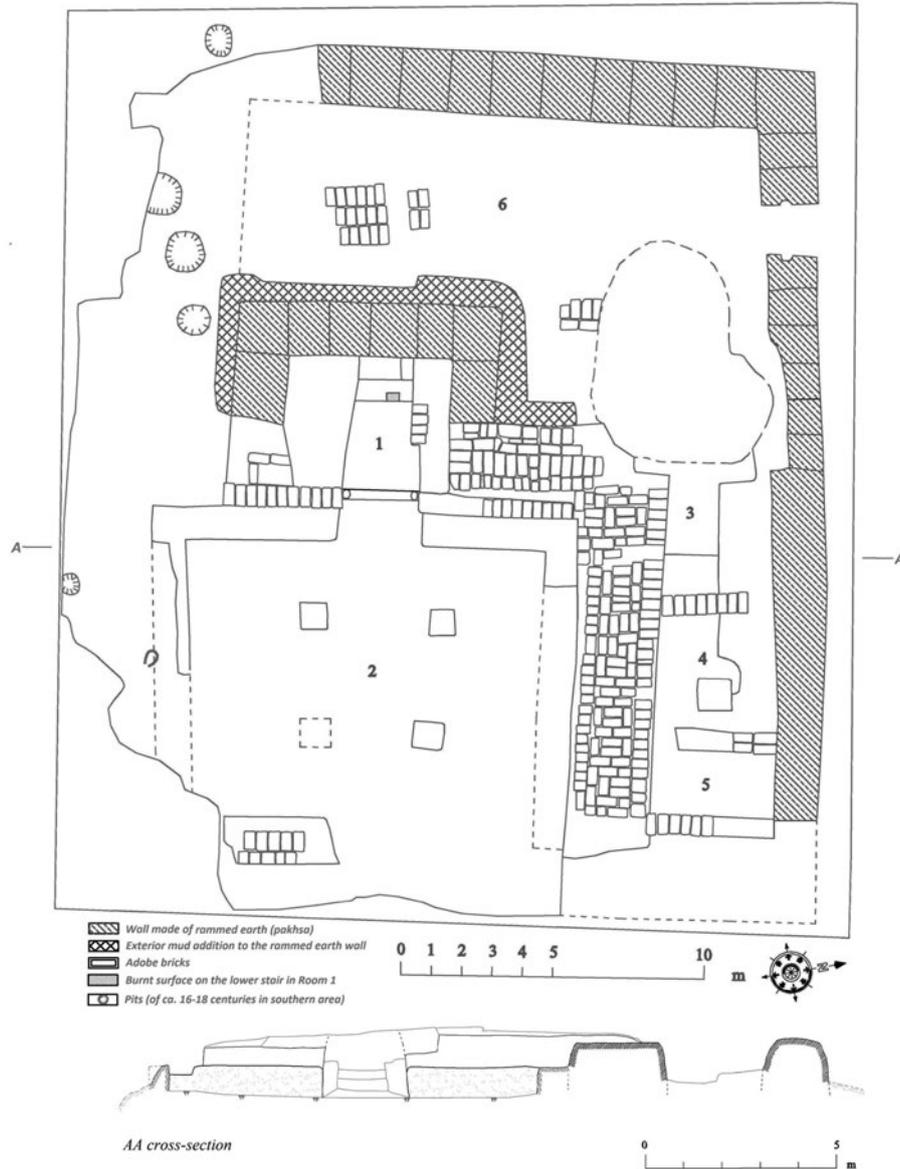


図2 トレンチ8 平面図(2023年度調査)

土器片を検討した結果、第4建設段階の遺構は今のところ5世紀頃に作られたと推定している。

①16~18世紀頃の遺構は、トレンチ⑧の南側に限定してみられることから、おそらく建物の一部を回収して利用していたものと推測された(図4)。

#### 4. 出土遺物

出土遺物は動物骨が比較的多く、他に数点の土器片と植物遺存体、壁画片などが出土した。Room 2内から出土した土器片は、いずれも5~6世紀頃のものである(図5)。日干しレンガ片を含む埋土から出土した土器片の内、赤色の彩色が施された丸底の杯(図5-4)、口縁が外反する直径24cmの杯(図5-2)は、バジュケントの寺院址(5~6世紀)などから同器種の出土が見



図3 トレンチ8 5世紀頃とみられる遺構(Room 2 調査終了時撮影)



図4 トレンチ8 16～18世紀頃の遺構

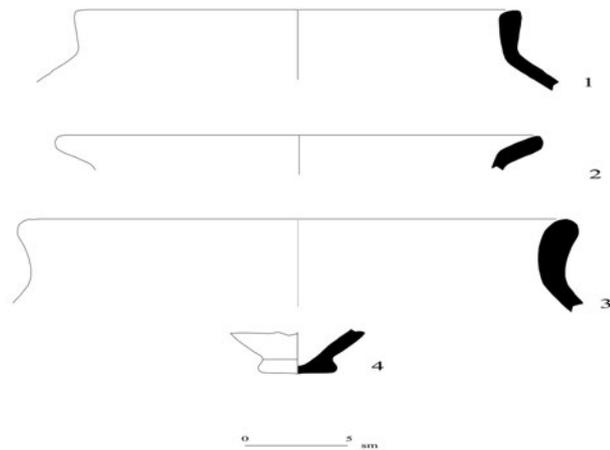


図5 トレンチ8 Room 2 出土土器

られる。

壁画は日干しレンガに漆喰層の上に彩色されており、黄色、白、黒が確認された。壁画片の取り上げと保存修復、および詳しい科学的調査等は、来年度以降に実

施する予定である。動物骨と植物遺存体についても、今後詳細な調査を行う予定である。

## 5. おわりに

本年度の発掘調査では、寺院建設以前の5世紀頃とみられる時期に、寺院とは構造の異なる壁画を備えた建物が存在していたこと、また、古代期の遺物(レンガ・土器片)が少量出土していることから、これよりさらに古い3～4世紀頃と紀元前後に建設年代が遡る可能性があることなどが明らかになった。寺院以前の遺構にも壁画が存在していることは、遺構の機能を明らかにする上でも重要であり、壁画がなぜ被熱を受けたのか、寺院以前に何が起きたのかなど、今後さらに詳しい調査を行っていきたい。

本発掘調査は、JSPS 科研費 23K00928、JP23K25400を受けて実施した。

### ■参考文献

- ・村上智見、ベグマトフ・アリシエル、サンディボエフ・アリシエル、宇野隆夫、寺村裕史、末森薫、押鐘浩之、伊藤幸司(2024年)「ソグディアナの都市を探る—ウズベキスタン共和国クルドル・テパ遺跡発掘調査(2023年度)—」『第31回西アジア遺跡調査報告会要旨集—令和5年度考古学が語る古代オリエント』pp.112-116
- ・Begmatov A., Murakami T. and Sandiboev A.(近刊). Discovery of a Temple at Kuldor-Tepa in Uzbekistan, *Asian Review of World Histories*, Brill.
- ・Saidov, Muminkhon, Kim H., Kang J. W., Aslanov A., Cho S. G., Berdimurodov A., Badriddinov D., Kadirov T. 2020. Quldortepa yodgorligida olib borilgan tadqiqotlar [research carried out at Kuldortepa]. *O'zbekistonda arxeologik tadqiqotlar 2018-2019 yillar*, Samarqand, 272-278.
- ・Sandiboev A. 2021. *Ilk O'rta asrlarda Maymurg* [Maymurg in the Early Medieval Period]. Tashkent. (in Uzbek).